

賢治と出

詩碑

コーラスライオット風
17回定期コンサート

堀内港から南へ行く

詩碑の設置は、岩手日報文
学賞受賞者で島根大の木村東
吉教授が平成12（2000）
年に出版した「宮沢賢治 春
と修羅第二集研究―その動態
の解明」がきっかけでした。

金子代表は、「賢治は花巻
農学校（現花巻農業高）の教
員時代の大正14（1925）
年1月5日から9日までの5
日間、北三陸海岸を旅しまし
た。久八線（現八戸線）種市
駅まで汽車に乗りこの駅から
は夜通し徒歩で久慈市、野田
村を通過して、下安家のあた
りに宿をとり、1月7日、ど
うも堀内から「発動汽船」で
宮古市、釜石市へ向かったよ
うです」と推察しています。

敗れし少年の歌へる
宮沢 賢治
ひかりわななくあけぞらに
清麗サフィアのさまなして
きみにたぐへるかの惑星の
いま融け行くぞかなしけれ
雪をかぶれるびやくしんや
百の海岬いま明けて
あをうなばらは万葉の
古きしらべにひかれるを



昨年10月、まついそ公園に建立された石碑

京都の愛好家が作曲

これまでは、大正14年の北
三陸の旅は、八戸から南下後、
村を経て田野畑村の羅賀港か
ら発動汽船に乗った（賢治の
スケッチ「発動汽船 一」
三）とされてきました。
これに対して、上記の著書

村と賢治との関わりを表し
た詩碑。この詩碑をきっかけ
に以前、村で賢治の詩に関す
る講演をした岩手県賢治学会
理事の阿部弥之さん（のぶみ）花巻
市IIの紹介で、曲を作曲した
賢治愛好家の浜垣誠司さんと
の出会いがありました。
浜垣さんは今年1月9日、

の中で、詩の中の描写を實際
の地形と比較するなどして、
賢治が乗船したのは、野田村
の下安家港、あるいは普代村
の堀内港、太田名部港の、三
つのうちのいずれかであった
との説を提唱しました。
金子代表はこの著書から堀
内港と推定。発動汽船は「濱
善丸」との結論に至りました。

賢治が三陸地方を旅した季節
に合わせて村を訪れ、詩碑な
どを見学しました。浜垣さん
は自身のホームページで賢治
の歌曲の編曲をしていて、ラ
イオット風のメンバーとの間
で、曲作りの話しが持ち上が
りました。そして、同月24日
ついに曲が完成しました。

コンサートに合わせ、妻の
優子さんと再び村を訪れた浜
垣さんは目を閉じて、しみじ
みと勸賞。「情感あふれる歌
声が印象的でした」と感激し
ていました。
賢治に関する今後のテーマ
として金子代表は「詩碑の建
立、三陸鉄道堀内駅の愛称の
変更、村の時報チャイムにと
考えています」と構想を語っ
ていました。

「賢治と語る普代会」が発
足し、詩碑が建立され1年。
その間、小学校などで賢治の
世界を知る講話なども開か
れ、村民の皆さんにより親し
まれるようになった岩手の先
達、宮沢賢治。コンサートで
歌も披露され、賢治を通じて
交流の輪は今後ますます広が
ります。

コンサートを終えて

コーラスライオット風
代表 森田真奈子さん談

17回のこのコンサートのコンセプト
は「出会いと交流」といたしました。
まず、地元との交流。中学校の校長・
教頭先生、中学生、そして地元のアイ
ナさん（若者など）たちと一緒に歌わ
せていただきました。

今回は普代中の音楽室で松内姿子
先生の指導の下に、ピアノ前田端枝さん
（芦渡）で練習いたしました。

もとよりわたくしどもは交流によっ
て育とうと活動してまいりました。県
知事ご夫妻との交流、賢治を真ん中に
した、京都の医師浜垣先生との大きな
出会いにも心から感謝とお礼をささげ
ます。

また、「敗れし少年の歌へる」の曲
をこんなにも早く手にした喜びととも
に…。

盛岡の北声会の皆さまとは、今年で
11回目の交流を重ねました。音楽する
こと、歌うことは、言葉を超えたもの
が、人間として最も大事なところが確
実に伝わっていくように思います。